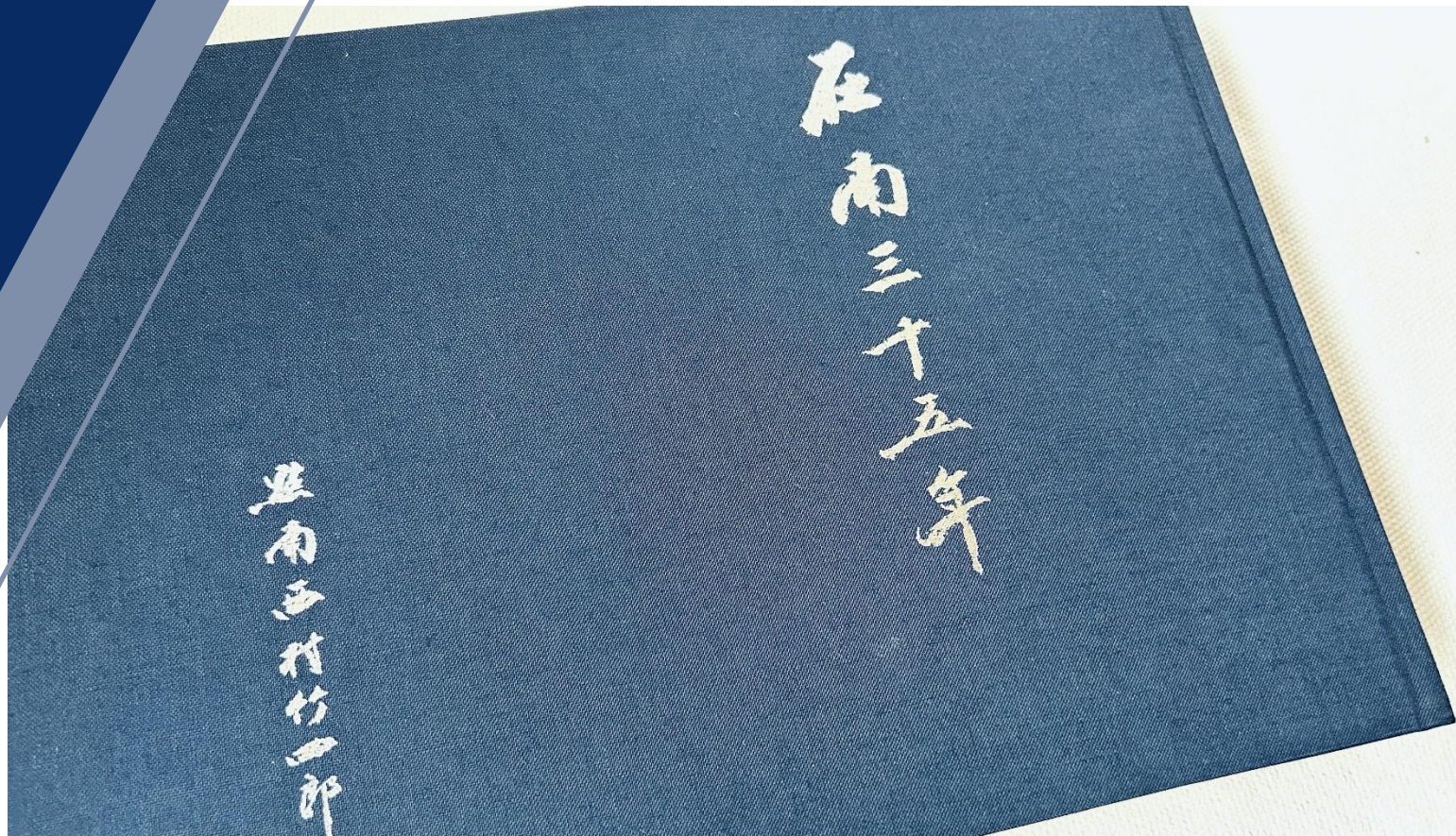




史蹟史料部

2024年5月9日

#52

日本人墓地公園

ニュースレター

西村竹四郎の碑

今回は[ニュースレター#7](#)でご紹介した[音吉の納骨堂](#)の向かい側にある、医師・西村竹四郎の碑をご紹介します。

西村竹四郎は1871（明治4）年4月、福岡県久留米市に生まれました。

医塾ならびに東京大学で医学を修め、1902（明治35）年当地の土を踏み、4月に医院「西村精通神」（にしむらせいつうしん）を開業しました。大正時代の日本人街地図を見ると、西村精通神はヒルストリートのアルメニア教会の近くにありました。

シンガポール在住の日本人だけでなく、地元の人々の医療に努める、孫文とも医療を通じて親交を結ぶとともに、日本人とシンガポールの人々の親善を図りました。

1935（昭和10）年、日本人会会長となります。当時、反日の嵐が起こる中で反日感情を和らげようと努力しました。特に「點南」（てんなん）という書の号を持ち、書道を通じて交流を行いました。

当墓地にある[二葉亭四迷の碑（ニュースレター#5）](#)は西村竹四郎の筆によるものです。

また、著書『在南三十五年』は、戦前のシンガポールにおける日本人社会の実状を知る貴重な史料として日本人会に残されています。



西村竹四郎

西村竹四郎は筆まめな人で、シンガポールで1930年代に刊行されていた雑誌『南洋時代』にその日記の抄録を連載し、1936年に編年体にとまとめた『在南三十五年』を出版しています。そこには日本人会の結成をめぐる1910（明治43）年のシンガポールの日本人社会の混乱ぶりや、ヨーロッパへの紀行が綴られています。

日本人墓地公園には彼と同時代を生きた同胞が多く眠っており、墓参り際にはウイスキーを持参し、生前に酒を好んだ医師・中野光三（ニュースレター #14）の墓前で盃を交わしながら近況報告をしたというような記述もあります。

また著書のなかには、「日本人墓地は僕の書展」という項目があり、西村竹四郎の筆による碑文が多くあるようです。「二葉亭四迷終焉之碑」の文字はその代表的なものです。



納骨堂の向かい側にある碑には、「西村竹四郎之碑 昭和拾七年弍月五日此地に眠る」と刻まれています。



旧墓碑にはめ込まれていたという英文の大理石は納骨堂に納められています。戦時中であつたため、命日は皇紀が用いられています。



